

ネクタイ、演歌、焼きも

秋 草 篇 二

昭和三十五年の秋だったと思うが、大平さんが官房長官になられて間もない時だった。その当時、電電公社の技師長だった米沢滋さんと一緒に、大平さんを伊豆川奈のゴルフにお誘いした。初めて官房長官という政府の要職について、やる気十分、きわめてご機嫌だった。その晩、夜おそくまで私と歓談した。自分が柄でもない役人になった動機から、池田勇人さんとの出会い、という話を話してくれた。

大平さんがまだ課長になったばかりの時、大蔵省の便所で池田さんとバツタリ顔を合わせた。その時「大平君、こんど俺は大蔵次官になるかも知れんよ」といわれたので、即座に「それはやめた方がいいね、柄でもないよ」といってやった……こんな話を面白おかしく話してくれた。池田さんとの間柄は、尋常のものでないことを知った次第だ。

その晩の話のなかで今でも印象に残っていることは、「僕は官房長官になって毎日毎晩、四回も記者会見しなければならぬ。若い記者諸君の目を引くために、毎日ネクタイを替えているんだよ、洋服を替えるのは金がかかるからね」といわれたことだった。

総理になられてから、大平さんがどんなネクタイをしているか気にもかけなかったが、官房長官という大役についた若い大平さんの意欲の片鱗を見たような気がして、忘れられない想い出である。

翌日、午前中ゴルフをやり、大平さんは東京に用事があるというので、中食もそこそこで熱海まで車で運転手

にお送りさせた。その運転手が帰ってきて開口一番、「驚きましたよ、ホテルを出て二、三分たった時、先生が突然デカイ声で歌をうたい出したんです。私は驚いてブレーキを踏みかけて後を見たんですが、先生はにこにこしながら『僕はねえ、独りで車に乗っている時が一番気楽なんだ、誰にも迷惑をかけないし、時々歌をうたって気分転換をやるんだよ』といわれたんです」との報告だった。

この話を後日、森田一さんに話したら、確かに演歌も好きだったし、車の中で歌をうたうこともよくあったが、幹事長や総理にもなると必ず秘書役やら護衛官などがそばに坐るので、晩年は気分を晴らすそうした機会もなかったようです、とのことだった。

私と同期の同窓生有志十名ほどが集まる会がある。年に数回、料亭に会合し、必ず大平さんをお招きして談笑する楽しい会だった。大平さんもすでに重責の地位にあられたので、肩のこるギラギラした話はさけて、軽い政治、外交問題にまつわるエピソードやユーモラスな話題をたねに、いつも大平さんの絶妙な座談に時間のたつのを忘れた。

料亭も一カ所に決められていて、しかも必ず真先に召し上げるものが焼いもか、ふかしいもである。女将も気をきかして何時の会合でも立派ないもを用意して、豪華な大皿に黒こげの焼いもを山と積んで持ってくる。私いもはきらいな方ではないが、大平さんのいも好きは別格だった。

大平さんのご逝去後、ご葬儀の終るまで毎日大平さんの記事がいっぱいだったが、納棺の時、奥様が三個の焼いもをお入れになったという記事を読んだ。大平さんの死を惜しみ悲しむ沢山の人のなかに、人間大平のほほえましい一面を感じたのは、私ひとりではなかったと思う。

(前日本電信電話公社総裁)